

望ましい人間関係を形成する手立てについて

—小学校道徳での授業実践を通して—

M16EP009

名取 美優

1.問題

(1)昨年度の研究より

昨年度の研究では、通常学級の担任の立場から、交流及び共同学習のあり方についての手立てや支援という視点から考えた。みんなのできる活動や児童同士が意識し合える場の設定をしていくことで、児童同士のかかわり合いを生み出すことができたということが、成果として挙げられた。一方で、特定の児童とのかかわり合いになってしまうことが多く、児童間でのかかわり合いや学び合いが確保されていたとは言えなかった。特定の児童というのは、日常生活の中でも特別支援学級の児童と積極的にかかわっている児童がほとんどであった。

このような成果と課題から、かかわり合いを生み出すためには、友達のことを理解し、自分にできることを考えて、それを行動に移せるようにしていくことが必要であると考えた。また、これは1つの授業の中で成り立つものではなく、日ごろから意識していないと自然なかかわり合いは生まれないのではないかと考えた。さらに、かかわり合いを生み出すためには、まず児童が望ましい人間関係を形成していくことが必要であり、そのために教師には何ができるかという手立てを考えていく必要があるのではないかと考えた。

(2)「望ましい人間関係」の定義

岡山教育センターの研究(2001)の中で、現在の子どもの友達の関係をめぐる様々な課題について「遊びの中で自然に身に着けていた社会性や創造性、自立性など望ましい人間関係をつくっていくための能力を身に着けることができないまま成長しているためで

はないか」と述べている。また、子どもたちの人間関係の現状について、「多くの小・中学生は、友だちとの関係、家族や教師との関係などの人間関係でイライラ感を募らせており」と述べている。これらのことより、児童はどのように周りの児童と人間関係を形成していけばいいのかわからず、様々な困難に直面しているのではないかと考えられる。

望ましい人間関係について以下の7点が挙げられている。(栃木県教育委員会事務局 2005)

- (i)他者との間で、互いの人格を尊重し合う意欲や態度が成り立っている関係
- (ii)他者との相互信頼が成り立っている関係
- (iii)トラブルや問題が生じた際に、共に力を合わせて解決しようとする意欲や態度が成り立っている関係
- (iv)それぞれが主体性を持ち、自分の意思や考えを表現することができる関係
- (v)集団内での少数の意見や考えを尊重することのできる関係
- (vi)特定の人間同士の中で完結した閉鎖的な関係ではなく、新たな人間との出会いの中で、異なる意見を理解していこうとする意欲や態度が保たれている関係
- (vii)互いによりよい在り方や生き方を求め、高め合っていくことができる関係

この7項目より、「(i)他者との間で、互いの人格を尊重し合う意欲や態度が成り立っている関係」と「(ii)他者との相互信頼が成り立っている関係」の2点に着目し、本研究では望ましい人間関係を「児童が周りの友達のことを考えて生活していく中で、互いを理解し、認め合える関係」と定義づける。

(3)道徳を設定した理由

小学校学習指導要領解説特別活動編（文部科学省 2017）の中で、「特別活動は、集団活動や体験的な活動を通して、多様な他者と人間関係を築き、協働して学級や学校文化の創造に参画する教育活動であり、人間関係形成や社会参画に資する力を育むことを目指すものである。…中略…学校における様々な集団活動や体験的な活動を通して、児童の人間形成を統合的に図ることを特質とする特別活動は、大きな役割を担うものである。」と記されている。このことより、望ましい人間関係を形成していくために、特別活動が特に重要視されていることがわかる。実際に先行研究や授業実践も特別活動や学級づくりの中で人間関係形成を図っていくものが多い。

しかし、小学校学習指導要領解説特別活動編（文部科学省 2017）の中で、「特別活動は、道徳科の授業で学んだ道徳的価値の理解及びそれに基づいた自己の生き方についての考えを、よりよい学級や学校の生活と人間関係を築こうとする実践的な活動や、キャリア形成と自己実現に向けた活動の中で実際に言動に表すとともに、集団の一員としてのよりよい生き方についての考えを深めたり、身に付けたりする場や機会でもある。」と記されている。このことより、望ましい人間関係を形成していく上でも、まずは道徳で価値を学ぶことが必要なのではないかと考える。

道徳を充実させるための 5 つの条件として横山（2007）は、以下の 5 点を挙げている。

- (i)道徳教育の目標について共通認識を持つ
- (ii)子どもの生活レベルで道徳の内容をとらえること
- (iii)計画を見直し実行すること
- (iv)道徳の時間の特質を理解すること
- (v)実施の際の指導技術に磨きをかけること

この中から特に(ii)の「子どもの生活レベルで道徳の内容をとらえること」に着目をした。また、横山（2007）は、『何を教えるの

か』ということ念頭に置いて考えるよりも「何を考えさせるのか」ということに比重をおいて検討することが肝要です。』と述べている。このことより、考えさせる授業が求められていることがわかる。

これらのことより、児童がしっかりと自分のことを考えることが必要なのではないかと考える。資料を使って「この人はどう思ったんだろう？あ、そう思ったのか。」と他人事として考えて終わるのではなく、児童が「ぼく、わたしはどうなんだろう。こういうことあったかな。ぼく、わたしはどんなことしているかな。」と、自分のことを考えていくような道徳をしていくことで、望ましい人間関係を形成していくことにつながるのではないかと考える。

2.目的

本研究では、望ましい人間関係を形成する手立てについて、小学校道徳での授業実践を通して考えることを目的とする。

3.方法

(1)実習について

学校：山梨県内公立小学校

学年：第 4 学年 1 クラス

男子 11 名 女子 22 名

特別支援学級 1 名 通級 2 名

期間：2017 年 5 月～12 月

(2)研究方法について

①参与観察

対象クラスの児童の実態や児童同士の関係、かかわり合い、教師のかかわり方等について参与観察を行った。

②アンケート実施

対象クラスの児童に対して、授業 1 週間前と授業 1 週間後にアンケートを実施した。児童が普段の生活の中で、周りの人を考えて行動することが、必要だと思われる場面について、以下の質問を行った。

なお、(vi)の質問に関しては授業後のアンケートのみ行った。

- (i)ごみが落ちていたら拾っていますか。
- (ii)そうじ分たんを仲良く決めていますか。
- (iii)ろうかが水でよごれている時、進んでふいていますか。
- (iv)遊具を使って遊ぶ時、友だちとゆずりあって遊んでいますか。
- (v)列をつくる時、ゆずりあっていますか。
- (vi)道徳で「雨のバス停留所で」を勉強してから、周りの人のことを気にかける機会は増えましたか。

③授業実践

教科：道徳

主題名：よく考えて行動する

内容C項目－(10) 規則の尊重

資料名：「雨のバス停留所で」

4.授業実践

(1)指導案について

①主題名 よく考えて行動する

内容C項目－(10) 規則の尊重

②資料名 「雨のバス停留所で」

③主題設定の理由

(ア)ねらいとする価値

本主題は、「内容項目－C (10) 規則の尊重」がねらいである。集団生活をしていく上で、定められているきまりや約束を守ることは、当たり前のことである。学習指導要領解説に「人と人とが仲間をつくり、よりよい人間関係を形成するうえでは、自分の思いのままに行動するのではなく、集団や社会のために自分が何をすればよいのか、また、自分に何ができるのか、自他の権利を十分に尊重する中で果たすべき自らの義務を考え」と示されている。目に見えるきまりや約束を守るだけではなく、集団生活をしていく上で、自分の事だけを考えて生活するのではなく、周りの人のことを考えながら生活していく事の大切さに気付かせ、周りの人のことを考えて行動し

ようとする気持ちを育てたい。

(イ)ねらいにかかわる児童の実態

学校や学級の約束やきまりを守って生活している児童は多く、また、守ろうとする意識は高い。その一方で、掃除の場面や休み時間など日常の何気ない場面で、自分のことを優先した行動をとってしまったたり、周りの人のことを考えずに行動をとってしまったたりすることがある。また、「自分がやらなくても誰かがやってくれるだろう。」と、行動に移せない児童もいる。

(ウ)資料について

本時では、規則の尊重を扱った「雨のバス停留所で」を資料として扱う。雨の日に、バス停付近のタバコ屋さんの軒下でバスを待っていた主人公のよし子は、バスが見えたので真っ先に駆け出し、停留所の一番前に並んだ。それを見た母は、よし子を元の場所まで引き戻した。バスに乗ってもよし子は納得をしていない。そんなよし子を母は知らんぷりをする。資料は、そんな母の横顔を見て、よし子が自分のしたことについて考える場面で終わる。

(エ)本時のねらい

自分の事だけではなく、周りの人のことを考えて行動しようとする態度を育てる。

(オ)展開

表 1. 指導案（一部抜粋）

過程	学習活動と内容（○発問）
導入	1.順番待ちをしているときの気持ちを考え、発表する。 ○順番待ちで並んでいるときのことを思い出してください。この時、どんな気持ちで待っていますか。
展開 前段	2.資料「雨のバス停留所で」を読んで考える。 ○バスを待っているときのよし子さんは、どのような気持ちだったでしょう。

	・出来事の確認をする。 ○よし子さんの行動に対して、お母さんはどんな行動をとりましたか。 ○お母さんは何も言っていませんが、もしお母さんが何か言ったとしたなら、どんなことを言ったのでしょうか。 ○よしこさんは、お母さんの横顔を見て、どんなことに気付いたのでしょうか。(主発問)
後段	3.自分のことを考える。 ○あの時もっと周りの人のことを考えればよかったなと思ったことがありますか。
終末	4.教師の話を聞く。

(2)具体的な手立てについて

①具体的な価値の設定

教師が学習指導要領の内容項目を細分化し、より具体的な価値の設定を行った。

これは、教師が児童に何を伝えたいか、何を考えさせたいかを明確にしておくことで、よりよい授業を考えていくための手立てになるのではないかと考え、行った。

②授業構成の工夫

展開の前段では「資料について」、後段では「自分の事」と分けて構成した。その際に発問やワークシートの工夫を行った。

(3)具体的手立ての実際

①具体的な価値の設定

まず小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（文部科学省 2017）の内容項目に目を通した。Cの「主として集団生活や社会のかかわりに関すること」という大きな枠組みの中の1つである(10)規則の尊重「約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること。」に着目をした。次に、概要として書かれている部分まで目を通した。その中から、今回の授業において何を大切にすることを考えたうえで、「自分の思いのままに行動するのでは

なく、自分が何をすればよいのか、自分に何ができるのか」という部分が必要であり、考えさせたい部分であると考えた。それらを踏まえたうえで、目に見えるきまりや約束を守るだけではなく、集団生活をしていく上で、自分の事だけを考えて生活するのではなく、周りの人のことを考えながら生活していく事の大切さに気付かせ、周りの人のことを考えて行動しようとする気持ちを育てたいという具体的な価値を設定した。

このように教師が、ねらいとする価値を具体的かつ明確にすることで、発問が精選され、児童もぶれずに考えることができたと考えられる。

②授業構成の工夫

【展開 前段】

展開の前段は、資料から考える時間にした。

(ア)資料提示の仕方

バスが来る前までを前半、バスが来たところからを後半と分けて授業を進めていった。前半部分では資料を配布せず、教師の範読と挿絵のみで進めていった。後半部分では、資料を配布し、教師の範読を行った。これは、先読みを防ぐことと、前半部分のバスを待っている気持ちを考える際に、児童の率直な気持ちを出させることを意図して行った。

発問 1

バスを待っているときのよし子さんはどのような気持ちだったでしょう。

児童の反応

- ・寒いな ・早くバスがこないかな
- ・つまらないな ・バス遅いな

資料を配らなかったことで、集中して話の内容を聞く児童の姿がみられた。また、児童の反応より、よしこの気持ちに寄り添い、児童の率直な気持ちを引き出すことができたのではないかと考えられる。

(イ)発問

発問 1 バスを待っているときのよし子さんは、どのような気持ちだったでしょう。

発問2 よしさんの行動に対して、お母さんはどんな行動をとりましたか。

発問3 お母さんは何も言っていませんが、もしお母さんが何か言ったとしたら、どんなことを言ったでしょうか。

発問4 (主発問)

よしこさんは、お母さんの横顔を見て、どんなことに気付いたでしょうか。

読み取りの発問を1問(発問2)、考える発問を3問(発問1, 3, 4)と読み取る内容を最小限に抑え、考える場面を多く設定した。これは、読み取って終わってしまうのではなく、考えることを重視するために行った。読み取りが少なく、考える場面を多くしたことで児童がよく考えている姿が見られた。

また、発問3は、児童の考えをより深くするために、客観的な視点として母のセリフを考える発問を設定した。

お母さんは何も言っていませんが、もしお母さんが何か言ったとしたらどんなことを言ったでしょうか。

児童の反応

- ・お年寄りや小さい子を優先しなさい。
- ・勝手に行動してはいけない。
- ・一番前に行ったらダメ。

ここで「一番前に行ったらダメ。」と出たので、なぜダメなのかを児童に質問した。これは、早く乗りたい気持ちを共感した上で、なぜダメなのかを考えることで、児童の中で葛藤をさせるために行った。しかし、すぐに「一番前の人は最初からいると思うし、順番を…」と児童から出てきた。それに対して、教師側から「寒かったら早く乗りたいもんね。」「順番を守らなきゃいけないから」などと提示をしてしまい、うまく葛藤させるような場面をつくりだすことができなかった。この後に、「他に何かありますか。」と再び聞き、児童から、「他の人も並んでいたよ。」「他の人のことも考えなさい。」と出てきた。そこをうまく「なぜダメなのか」という部分とつなげていくこ

とで、児童がより深く考えることができたのではないかと考える。

このような発問の工夫を行うことで、それぞれの発問に対して、よく考えている姿が見られた。また、より児童が深く考えるためには児童が葛藤するような展開を取り入れることも必要だったのではないかと考えられる。

(ウ)ワークシート

発問3の部分に関して、児童がイメージしやすく、考えやすいように母の顔と吹き出しを付けた。(図1)

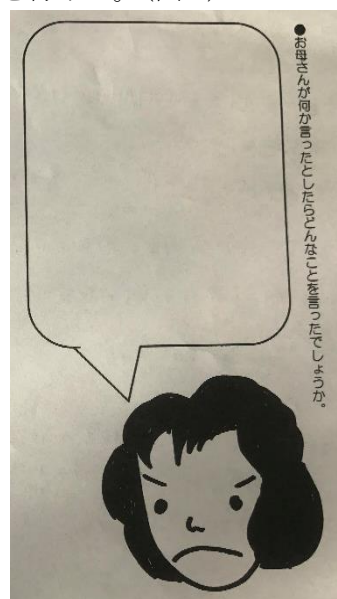


図1.ワークシート(発問3)

- ・こらー。ちゃんと並びなさい。先に行ったらダメでしょう。
- ・よしこ。なんで一番前に並ぶの。疲れているのはわかるけどもっと疲れている人もいるの。順番を守ってちょうだい。

児童の記述の一例を提示した。このように、客観的に見たよしこを、児童が自分なりに考えて書けていることがわかる。

ワークシートを工夫することで、児童が考えやすくなる手立ての一つであると考えられる。一方で、児童の考えにレールを敷き過ぎてしまうことにもなりかねないので、児童の考えの幅を広げすぎず、狭めすぎないようなワークシートをつくっていく必要があると考

えられる。

【展開 後段】

展開の後段は、資料から離れ、今までの自分を振り返り考える時間にした。

（ア）発問とワークシート

今後の児童自身の日常生活につなげていけるようにするために設定をした。

図2の囲み部分は、ねらいが先にわかってしまわないように空欄にしておいた。実際の授業では、「この空欄にはどんな言葉が入るでしょうか。」と全体で児童に聞き、児童から「周りの人のことを考えればよかった」と出てきた。児童から出てきた言葉をそのまま黒板に提示し、ワークシートに書かせた。

図2.ワークシート(発問5)

発問5

あの時もっと（周りの人のことを考えればよかったな）と思ったことがありますか。

児童の反応（ワークシートより抜粋） 原文ママ

・電車に乗っているとき

席をゆずればよかったなあ。

・学校で科学館へ行った時

他の人（一ばん）がならんでいたのにゆずらなかった。

・家で食べ物のジャンケンをする時

自分のことしか考えていなくてジャンケンをせずに食べ物を食べちゃったこと。

・おにごっこ

かってにわたしがぬけたから、いやなきもちになったと思う。

・中休みにサッカーの時

もっと友達にパスをすればよかったなと思ったことがあります。

・ブランコにのっていた時

かしてと言われた時、はやくかしてあげればよかった。

・習い事のかたづけの場面

かたづけが大変で、でも人が3,4人いたけど、大変なかたづけは、もう少し人数がひつようなのに、みんなが集まっているからつられてみんなの方へいっちゃったから助けてあげればよかった。

・水泳のこういしつのロッカーがあいている所が少なかったとき

二つもロッカーをつかってしまった。(ビートばんやプル、パドルは下におけばよかった)

児童の反応から、自分なりに自分自身のことを振り返って考えることができていることがわかる。学校でのことを考えている児童、公共の場でのことを考えている児童など様々な場面でのことを考えることができている。

一方で、書きだすことができない児童もいた。「思ったことがない。」や「多すぎてわからない。」という理由を言っていた。そのことから、自分のことを考える際、児童の実態や内容によって、より具体的な場면을提示して考えさせたり、振り返りだけではなく、今後のことを考えさたりするような発問をしていくことが必要だと考えられる。

【終末】

終末の教師の話は、「えらい」「すごい」「こうしようね」というように、児童が「こうならなきゃ。」「そうしなきゃ。」と思ってしまう

ような価値の押し付けとなってしまう話ではなく、見た話や出来事、格言や名言などといった、教師から価値を押し付けてしまわないような話をしていくことが必要だと考えられる。

実際の授業では、以下のような話をした。

この前の校外学習で、あるお友達が体験をしていました。その体験をする機械のところには誰も並んでなかったのですが、その子は続けてやろうと準備をしていました。そこに、他の学校のみんなより小さいお友達がやってきました。すると、その子が「先にいいよ。」と言って先にやらせてあげていました。そんな場面を先生は見ました。

児童は、しっかりと話を聞くことができていた。児童の中での出来事を話すことで、児童も身近に考えることができたのではないかと考えられる。このように出来事などを話すことは、児童自身がどんなことをしたらいいのか考えるきっかけとなり、今後の生活や行動にもつながっていくのではないかと考えられる。一方で、ねらいとする価値があるので、その部分がうまく組み込まれているような話を考える必要がある。

(5)アンケート調査

授業の事前事後でアンケートを実施した。以下の質問を行った。

- (i)ごみが落ちていたら拾っていますか。
- (ii)そうじ分たんを仲良く決めていますか。
- (iii)ろうかが水でよごれている時、進んでふいていますか。
- (iv)遊具を使って遊ぶ時、友だちとゆずりあって遊んでいますか。
- (v)列をつくる時、ゆずりあっていますか。
- (vi)道徳で「雨のバス停留所」を勉強してから、周りの人のことを気にかける機会は増えましたか。

授業後のみ、(vi)を設置した。なお、事前アンケートをしていない児童と授業を受けていない児童、計4名は除いてある。

表 2.授業前アンケート結果

質問 内容	している	時々 している	あまり していない	していない	合計
(i)	5 人	21 人	3 人	0 人	29 人
(ii)	22 人	5 人	2 人	0 人	29 人
(iii)	4 人	16 人	9 人	0 人	29 人
(iv)	19 人	8 人	2 人	0 人	29 人
(v)	22 人	6 人	1 人	0 人	29 人

表 3.授業後アンケート

質問 内容	している	時々 している	あまり していない	していない	合計
(i)	14 人	13 人	2 人	0 人	29 人
(ii)	22 人	5 人	1 人	1 人	29 人
(iii)	9 人	14 人	6 人	0 人	29 人
(iv)	24 人	5 人	0 人	0 人	29 人
(v)	19 人	10 人	0 人	0 人	29 人

表 2 と表 3 を比較してみると、ほとんどの項目で「している」「時々している」の人数が増えていることがわかる。特に人間関係形成に関わると考えられる(iv)と(v)の「あまりしていない」「していない」が0人になったことは、成果であるといえる。授業の中で自分のことを考えたことによって、周りの人のことを考えて行動することが増えたのではないかと考えられる。

また、授業後アンケートの中で、『道徳で「雨のバス停留所」を勉強してから、周りの人のことを気にかける機会は増えましたか。』という質問を行った。(表 4)

表 4.授業後アンケート項目 6 の結果

増えた	少し増えた	あまり 増えていない	増えて いない
16 人	10 人	3 人	0 人
55.2%	34.5%	10.3%	0%

この結果より、多くの児童が、授業後に周りの人を気にする機会が増えていることがわかる。一方で、「あまり増えていない」と答えた児童もいた。「あまり増えていない」と答え

た児童を見ると、今までもそのような行動を心がけていたのではないかと考えられる児童もいた。

「増えた」と答えた児童の中にも、なかなか周りのことを考えて行動することが難しい児童が、何人かいることも実際である。実習の中で、周りの児童の注意を聞き入れず、自分がやりたいことをやり続けてしまった児童や、自分の都合のいいように解釈をし、友達に迷惑をかけてしまった児童などをその後も見かけた。道徳を通して、児童が考えたり感じたことを実生活で実践したり考えたりすることは簡単ではないということがわかった。それを踏まえ、継続して児童が意識をしていけるような手立てを考えていくことが必要であると考えられる。

5.研究のまとめ

(1)成果

表4のアンケート結果より、約90%の児童が「周りの人を気にすることが増えた」と答えている。この結果より、普段の生活において道徳で学んだことを、少なからず意識していることがわかる。道徳を通した今回の取組は、望ましい人間関係の定義とした「周りの人を考えて生活していく」という部分で、1つの手立てとして有効なのではないかと考えられる。

また、道徳の授業のどの内容項目においても、自分のことを考える道徳の授業を続けていくことで、児童の普段の生活での意識も変わっていくのではないかと考えられる。普段の生活で意識していけるようになれば、望ましい人間関係形成にもつながっていくのではないかと考えられる。

(2)課題

①「考える」と「実行する」を結び付けるための手立てを考えていく必要性

児童のワークシートの記述と、授業後の日常での行動を見ていく中で、考えることがで

きても、行動に移すことが難しいと思われる児童がいるということもわかった。また、頭で理解できていても行動に移すことが難しいこともある。そういった中で、児童が考えて終わりではなく、行動につなげていけるような手立てを考えたり、教師のかかわり方を考えていくことが必要であると考えられる。

②道徳での学びを生かしていくことの重要性

今回のような道徳の授業を行っていく事が1つの手立てとして有効であると考えられるが、道徳の授業をただだけでは望ましい人間関係を形成していくことは難しいと考えられる。道徳の授業が望ましい人間関係を形成する基盤であり、道徳で学んだことを特別活動、学級づくり、各活動、各教科等すべての教育活動と繋げて取り組んでいくことが大切であると考えられる。

望ましい人間関係を形成していくために、各方面での学びを結びつけ、1つの手立てだけではなく、様々な手立てを実態やクラスの様子に合わせて行っていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- ・文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 特別活動編
- ・文部科学省（2015）小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編
- ・岡山県教育センター（2001）望ましい人間関係を育成するための実践的研究 ―社会的スキルの習得を通して―
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/study/00kiyoPDF/00nanba.pdf>
- ・栃木県教育委員会事務局（2005）望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・援助の在り方
www.pref.tochigi.lg.jp/m04/education/gakkoukyouiku/seitoshidou/documents/h17.pdf
- ・横山利弘（2007）「道徳教育、画餅からの脱却―道徳をどう説く―」 暁教育図書